

# ある崖上の感情

梶井基次郎

青空文庫



ある蒸し暑い夏の宵よいのことであつた。山ノ手の町のとあるカフェで二人の青年が話をしていた。話の様子では彼らは別に友達と  
いうのではなさそうであつた。銀座などちがつて、狭い山ノ手  
のカフェでは、孤独な客が他所よそのテーブルを眺めたりしながら時  
を費すことはそう自由ではない。そんな不自由さが——そして狭  
さから来る親しさが、彼らを互いに近づけることが多い。彼らも  
どうやらそうした二人らしいのであつた。

一人の青年はビールの酔いを肩先にあらわしながら、コップの

尻でよごれた卓子テーブルにかまわず肱ひじを立てて、先ほどからほとんど一人で喋しゃべっていた。漆喰しつくいの土間の隅すみには古ぼけたビクターの蓄音器が据えてあつて、磨り減ったダンスレコードが暑苦しく鳴っていた。

「元来僕はね、一度友達に凶星を指されたことがあるんだが、放浪、家をなさないという質たちに生まれついているらしいんです。その友達というのは手相を見る男で、それも西洋流の手相を見る男で、僕の手相を見たとき、君の手にはソロモンの十字架がある。それは一生家を持ってない手相だと言ったんです。僕は別に手相などを信じないんだが、そのときはそう言われたことでぎくつとしましたよ。とても悲しくてね——」

その青年の顔にはわずかの時間感傷の色が酔いの下にあらわれて見えた。彼はビールを一と飲みするとまた言葉をついで、

「その崖の上へ一人で立って、開いている窓を一つ一つ見ていると、僕はいつでもそのことを憶い出おもすんです。僕一人が世間に住みつく根を失って浮草のように流れている。そしていつもそんな崖の上に立って人の窓ばかりを眺めていなければならぬ。すっかりこれが僕の運命だ。そんなことが思えて来るのです。——しかし、それよりも僕はこんなことが言いたいんです。つまり窓の眺めというものには、元来人をそんな思いに駆るあるものがあるんじゃないか。誰でもふとそんな気持ちに誘われるんじゃないか、というのですが、どうです、あなたはそうしたことをお考えには

ならないですか」

もう一人の青年は別に酔っているようでもなかった。彼は相手の今までの話を、そうおもしろがつてもいないが、そうかと言って全然興味がなくもないといった穏やかな表情で耳を傾けていた。彼は相手に自分の意見を促されてしばらく考えていたが、

「さあ……僕にはむしろ反対の気持になった経験しか憶い出せない。しかしあなたの気持は僕にはわからなくはありません。反対の気持になった経験というのは、窓のなかにいる人間を見ていてその人達がなにかはかない運命を持ってこの浮世に生きている。というふうに見えたということなんです」

「そうだ。それは大いにそうだ。いや、それがほんとうかもしれ

ん。僕もそんなことを感じていたような気がする」

酔った方の男はひどく相手の言ったことに感心したような語調で残っていたビールを一息に飲んでしまった。

「そうだ。それであなたもなかなか窓の大家だ。いや、僕はね、実際窓というものが好きで堪たまらないんですよ。自分のいるところからいつも人の窓が見られたらどんなに楽しいだろうと、いつもそう思ってるんです。そして僕の方でも窓を開けておいて、誰かの眼にいつも僕自身を曝さららしているのがまたとても楽しいんです。こんなに酒を飲むにしても、どこか川つぷちのレストランみたいなところで、橋の上からだとか向こう岸からだとか見ている人があつて飲んでいけるのならどんなに楽しいでしょう。『いかにあわ

れと思うらん』僕には片言のような詩しか口に出て来ないが、実際いつもそんな気持になるんです」

「なるほど、なんだかそれは楽しそうですね。しかしなんという  
閑のだかな趣味だろう」

「あつはつは。いや、僕はさつきその崖の上から僕の部屋の窓が見えると言ったでしょう。僕の窓は崖の近くにあつて、僕の部屋からはもう崖ばかりしか見えないんです。僕はよくそこから崖路を通る人を注意しているんですが、元来めつたに人の通らない路で、通る人があつたつて、全く僕みたいにそこでながい間町を見ているというような人は決してありません。実際僕みたいな男はよくよくの閑人なんだ」



「ちよつと君。そのレコード止してくれない」聴き手の方の青年はウエイトレスがまたかけはじめた「キャラバン」の方を向いてそう言った。「僕はあのジャズというやつが大嫌いなんだ。厭だと思ひ出すとても堪らない」

黙つてウエイトレスは蓄音器をとめた。彼女は断髪をして薄い夏の洋装をしていた。しかしそれには少しもフレツシユなところがなかつた。むしろ南京鼠なんきんねずみの匂いでもしそうな汚いエキゾテイズムが感じられた。そしてそれはそのカフェがその近所に多く住んでいる下等な西洋人のよく出入りするといふ噂うわさを、少し陰気に裏書きしていた。

「おい。百合ゆりちゃん。百合ちゃん。生をもう二つ」

話し手の方の青年は馴染のウエイトレスをぶつきら棒な客から救つてやるというような表情で、彼女の方を振り返つた。そしてすぐ、

「いや、ところがね、僕が窓を見る趣味にはあまり人に言えない欲望があるんです。それはまあ一般に言えば人の秘密を盗み見るという魅力なんです、僕のはもう一つ進んで人のベッドシーンが見たい、結局はそういつたことに帰着するんじゃないかと思われするような特殊な執着があるらしいんです。いや、そんなものをほんとうに見たことなんぞはありませんがね」

「それはそうかもしれない。高架線を通る省線電車にはよくそういったマニヤの人が乗っているということですよ」

「そうですかね。そんな一つの病型タイプがあるんですかね。それは驚いた。……あなたは窓というものにそんな興味をお持ちになったことはありませんか。一度でも」

その青年の顔は相手の顔をじっと見詰めて返答を待っていた。

「僕がそんなマニヤのことを言う以上僕にも多かれ少なかれそんな知識があると思つていいでしょう」

その青年の顔にはわずかばかりの不快の影が通り過ぎたが、そう答えて彼はまた平気な顔になった。

「そうだ。いや、僕はね、崖の上からそんな興味で見る一つの窓があるんですよ。しかしほんとうに見たということは一度もないんです。でも実際よく瞞だまされる、あれには。あつはつはは……僕

がいったいどんな状態でそれに耽ふけっているか一度話してみましようか。僕はながい間じいつと眼を放さずにその窓を見ているのです。するとあんまり一生懸命になるもんだから足許もとが変たよに便りなくなつて来る。ふらふらつとして實際崖から落つこちそうな気持になる。はつは。それくらいになると僕はもう半分夢を見ているような気持です。すると変なことには、そんなとき僕の耳には崖路を歩いて来る人の足音がきまつたようにして来るんです。でも僕はよし人がほんとうに通つてもそれはかまわないことにしている。しかしその足音は僕の背後へそうつと忍び寄つて来て、そこでぴたりと止まつてしまふんです。それが妄もうそう想というものでしようね。僕にはその忍び寄つた人間が僕の秘密を知っているよう

に思えてならない。そして今にも襟えりがみ髪つかを掴むか、今にも崖から突き落とすか、そんな恐怖で息も止まりそうになっているんです。しかし僕はやっぱり窓から眼を離さない。そりやそんなときはもうどうなつてもいいというような気持ですね。また一方ではそれがたいていは僕の気のせいだということは百も承知で、そんな度胸もきめるんです。しかしやっぱり百に一つもしやほんとうの間ではないかという気がいつでもする。変なものです。あつはつはは」

話し手の男は自分の話に昂こうふん奮ふんを持ちながらも、今度は自嘲的いどなそして悪魔的といえるかも知れない挑いどんだ表情を眼に浮かべながら、相手の顔を見ていた。

「どうです。そんな話は。——僕は今はもう実際に人のベッドシーンを見るということよりも、そんな自分の状態の方がずっと魅惑的になって来ているんです。何故と言つて、自分の見ている薄暗い窓のなかで、自分の思っているようなものでは多分ないことが、僕にはもう薄<sup>うす</sup>うすわかつているんです。それでいて心を集めてそこを見ているとありありそう思えて来る。そのときの心の状態がなんとも言えない恍惚<sup>こうごつ</sup>なんです。いったいそんなことがあるものですかね。あつはつはは。どうです、今から一緒にそこへ行つてみる気はありませんか」

「それはどちらでもいいが、だんだん話が佳境には入<sup>い</sup>つて来ましたね」

そして聴き手の青年はまたビールを呼んだ。

「いや、佳境には入って来たというのはほんとうなんですよ。僕はだんだん佳境には入って来たんだ。何故なぜって、僕には最初窓がただなにかしらおもしろいものであったに過ぎないんだ。それがだんだん人の秘密を見るという気持が意識されて来た。そうでしょう。すると次は秘密のなかでもベッドシーンの秘密に興味を持ち出した。ところが、見たと思っただけがどうやらちがうものらしくなって来た。しかしそのときの恍惚こうこう状態そのものが、結局すべてであるということがわかって来た。そうでしょう。いや、君、実際その恍惚状態がすべてなんですよ。あつはつはは。空の空なる恍惚万歳だ。この愉快的な人生にプロジットしよう」

その青年にはだいぶ酔いが発して来ていた。そのプロジツトに  
応じなかつた相手のコツプへ荒々しく自分のコツプを打ちつけて、  
彼は新しいコツプを一気に飲み乾した。

彼らがそんな話をしていたとき、扉をあけて二人の西洋人がは  
入つて来た。彼らはは入つて来ると同時にウエイトレスの方へ色  
っぽい眼つきを送りながら青年達の横のテーブルへ坐つた。彼ら  
の眼は一度でも青年達の方を見るのでもなければ、お互いに見交  
わすというのでもなく、絶えず笑顔を作つて女の方へ向いていた。  
「ポーリンさんにシマノフさん、いらつしやい」  
ウエイトレスの顔は彼らを迎える大仰な表情でにわかしやべに生き生  
きし出した。そしてきやつきやつと笑いながら何か喋り合つてい



だが、彼女の使う言葉はある自由さを持った西洋人の日本語で、それを彼女が喋るとき青年達を給仕していたときとはまるでちがった変な魅力が生じた。

「僕は一度こんな小説を読んだことがある」

聴き手であつた方の青年が、新しい客の持つて来た空気から、話をまたもとへ戻した。

「それは、ある日本人がヨーロッパ欧羅巴へ旅行に出かけるんです。英国、フランス仏蘭西、ドイツ独逸とずいぶんながいごつたごたした旅行を続けておしまいにウィーンへやつて来る。そして着いた夜あるホテルへ泊まるんですが、夜中にふと眼をさましてそれからすぐ寝つけないで、深夜の闇のなかに旅情を感じながら窓の外を眺めるんです。空は

美しい星空で、その下にウィーンの市が眠っている。その男はしばらくその夜景に眺め耽っていたが、彼はふと闇のなかにたった一つ開け放された窓を見つめる。その部屋のなかには白い布のよかたまうな塊りが明るい燈火に照らし出されていて、なにか白い煙みたのぼようなものがそこから細くまっすぐに立ち騰のぼっている。そしてそれがだんだんはつきりして来るんですが、思いがけなくその男がそこに見出したものはベッドの上にほしいままな裸体を投げ出している男女だったのです。白いシーツのように見えていたのがそれで、静かに立ち騰のぼっている煙は男がベッドで燻くゆらしている葉巻の煙なんです。その男はそのときどんなことを思ったかというところ、これはいかにも古都ウィーンだ、そしていま自分は長い旅の末に

やつとその古い都へやって来たのだ——そういう気持がしみじみと湧いたというのです」

「そして？」

「そして静かに窓をしめてまた自分のベッドへ帰って寝たというのですが——これはずいぶんまえに読んだ小説だけれど、変に忘れられないところがあつて僕の記憶にひっかかっている」

「いいなあ西洋人は。僕はウィーンへ行きたくなくなった。あつはつは。それより今から僕と一緒に崖の方まで行かないですか。ええ」

酔った青年はある熱心さで相手を誘っていた。しかし片方はただ笑うだけでその話には乗らなかつた。

生島（これは酔っていた方の青年）はその夜晩くおそ自分の間借りしている崖下の家へ帰つて来た。彼は戸を開けるととき、それが習慣のなんとも言えない憂鬱を感じた。それは彼がその家の寝ている主婦を思い出すからであつた。生島はその四十を過ぎた寡婦かふである。「小母おばさん」となんの愛情もない身体あきの關係を続けていた。子もなく夫にも死に別れたその女にはどこことなく諦あきらめた静けさがあつて、そんな關係が生じたあとでも別に前と変わらない冷淡さもしくは親切さで彼を遇していた。生島には自分の愛情のなさを彼女に偽る必要など少しもなかつた。彼が「小母さん」を呼ん

で寢床を共にする。そのあとで彼女はすぐ自分の寢床へ帰ってゆくのである。生島はその当初自分らのそんな關係に淡々とした安易を感じていた。ところが間もなく彼はだんだん堪<sup>たま</sup>らない嫌悪を感じ出した。それは彼が安易を見出していると同じ原因が彼に反逆するのであった。彼が彼女の膚に触れているとき、そこにはなんの感動もなく、いつもある白<sup>しら</sup>じらしい氣持が消えなかつた。生理的な終結はあつても、空想の満足がなかつた。そのことはだんだん重苦しく彼の心にのしかかつて来た。そのうちに彼は晴ればれとした往来へ出ても、自分に羨<sup>しな</sup>びた古手拭のような匂いが沁<sup>し</sup>みているような氣がしてならなくなつた。顔貌にもなんだかいやな線があらわれて来て、誰の目にも彼の陥っている地獄が感づかれ

そんな不安が絶えずつきまとった。そして女の諦めたあきらような平気さが極端にいらいらした嫌悪を刺戟するのだった。しかしその憤ふ懣んまんが「小母さん」のどこへ向けられるべきだろう。彼が今日にも出てゆくと言っても彼女が一言の不平も唱えないことはわかりきったことであつた。それでは何故出てゆかないのか。生島はその年の春ある大学を出てまだ就職する口がなく、国へは奔走中と言つてその日その日をまったく無気力な倦怠で送っている人間であつた。彼はもう縦のものを横にするにも、魅入られたような意志のなさを感じていた。彼が何々をしようと思うことは脳細胞の意志を刺戟しない部分を通つて抜けてゆくのからしかつた。結局彼はいつまで経つてもそこが動けないのである。——

主婦はもう寝ていた。生島はみしみし階段をきしらせながら自分の部屋へ帰った。そして硝子窓ガラスをあけて、むっとするようにもった宵の空気を涼しい夜気と換えた。彼はじっと坐ったまま崖の方を見ていた。崖の路は暗くてただ一つ電柱についている燈がそのありかを示しているに過ぎなかった。そこを眺めながら、彼は今夜カフェで話し合った青年のことを思い出していた。自分が何度誘ってもそこへ行くとは言わなかったことや、それから自分が執しつこく紙と鉛筆で崖路の地図を書いて教えたことや、その男の頑かたくなに拒んでいる態度にもかかわらず、彼にも自分と同じような欲望があるにちがいないとなぜか固く信じたことや——そんなことを思い出しながら彼の眼は不知不識しらずしらず、もしやという期待で白

い人影をその闇のなかに探しているのであった。

彼の心はまた、彼がその崖の上から見るあの窓のことを考え耽<sup>ふけ</sup>つた。彼がそのなかに見る半ば夢想のそして半ば現実の男女の姿態がいかに情熱的で性欲的であるか。またそれに見入っている彼自身がいかに情熱を覚え性欲を覚えるか。窓のなかの二人はまるで彼の呼吸を呼吸しているようであり、彼はまた二人の呼吸を呼吸しているようである、そのときの恍惚<sup>こうこう</sup>とした心の陶醉を思い出していた。

「それに比べて」と彼は考え続けた。

「俺<sup>おれ</sup>が彼女に対しているときはどうであろう。俺はまるで悪い暗示<sup>し</sup>にかかってしまったように白<sup>しら</sup>じらとなってしまう。崖の上の陶



酔のたとえ十分の一でも、何故彼女に対するとき帰って来ないのか。俺は俺のそうしたものを窓のなかへ吸いとられているのではなからうか。そういう形式でしか性欲に耽<sup>ふけ</sup>ることができなくなっているのではなからうか。それとも彼女という対象がそもそも自分には間違つた形式なのだらうか」

「しかし俺にはまだ一つの空想が残っている。そして残っているのはただ一つその空想があるばかりだ」

机の上の電燈のスタンドへはいつの間にかたくさん虫が集まつて来ていた。それを見ると生島は鎖をひいて電燈を消した。わずかそうしたことすら彼には習慣的な反対——崖からの瞰<sup>かんかけい</sup>下景に起こつたであらう一つの変化がちらと心を掠めるのであつた。部

屋が暗くなると夜気がことさら涼しくなった。崖路の闇もはつきりして来た。しかしそのなかには依然として何の人影も立ってはいなかった。

彼にただ一つの残っている空想というのは、彼がその寡婦と寝床を共にしているとき、ふいに起こって来る、部屋の窓を明け放してしまうという空想であった。勿論彼はそのとき、誰かがその崖路に立っていて、彼らの窓を眺め、彼らの姿を認めて、どんなにか刺戟を感じるであろうことを想い、その刺戟を通して、何の感動もない彼らの現実にもある陶醉が起こって来るだろうことを予想しているのであった。しかし彼にはただ窓を明け崖路へ彼らの姿を晒さらすということばかりでもすでに新鮮な魅力であった。

彼はそのときの、薄い刃物で背を撫でられるような戦慄を空想した。そればかりではない。それがいかに彼らの醜い現実に対する反逆であるかを想像するのであった。

「いったい俺は今夜あの男をどうするつもりだったんだろう」

生島は崖路の闇のなかに不知不識しらずしらず自分の眼の待っていたものがその青年の姿であつたことに気がつくつと、ふと醒さめた自分に立ち返つた。

「俺ははじめあの男に対する好意に溢れていた。それで窓の話などを持ち出して話し合う気になつたのだ。それだのに今自分にある男を自分の欲望の傀儡かいらいにしようと思つていたような気がしてならないのは何故だろう。自分は自分の愛するものは他人も愛す

るにちがいないという好意に満ちた考えで話をしていたと思つて  
いた。しかしその少し強制がましい調子のなかには、自分の持つ  
ている欲望を、言わば相手の身体にこすりつけて、自分と同じよ  
うな人間を製造しようとしていたようなところが不知不識にあつ  
たらしい気がする。そして今自分の待つていたものは、そんな欲  
望に刺戟されて崖路へあがつて来るあの男であり、自分の空想し  
ていたことは自分達の醜い現実の窓を開けて崖上の路へ曝さらすこと  
だったのだ。俺の秘密な心ちやくのなかだけの空想が俺自身には関係な  
く、ひとりでの意志で著々と計画を進めてゆくというような、い  
つたいそんなことがあり得ることだろうか。それともこんな反省  
すらもちやんと予定の仕組で、今もしあの男の影があすこへあら

われたら、さあいよいよ舌を出すつもりにしていたのではなからうか……」

生島はだんだんもつれて来る頭を振るようにして電燈を点し、  
寝床を延べにかかった。

## 3

石田（これは聴き手であつた方の青年）はある晩のことその崖路の方へ散歩の足を向けた。彼は平常歩いてきた往来から教えられたはじめての路へ足を踏み入れたとき、いったいこんなところが自分の家の近所にあつたのかと不思議な気がした。元来その辺

はむやみに坂の多い、丘陵と谷とに富んだ地勢であつた。町の高みには皇族や華族の邸に並んで、立派な門構えの家が、夜になると古風な瓦斯燈の点く静かな道を挟んで立ち並んでいた。深い樹立のなかには教会の尖塔が聳えていたり、外国の公使館の旗がヴィラ風な屋根の上にひるがえつていたりするのが見えた。しかしその谷に当つたところには陰気なじめじめした家が、普通の通行人のための路ではないような隘路をかくして、朽ちてゆくばかりの存在を続けているのだつた。

石田はその路を通つてゆくとき、誰かに咎められはしないかというようなうしろめたさを感じた。なぜなら、その路へは大つぴらに通りすがりの家が窓を開いているのだつた。そのなかには肌

脱ぎになった人がいたり、柱時計が鳴っていたり、味気ない生活が蚊遣りを燻したりしていた。そのうえ、軒燈にはきまつたようにやもりがとまつていて彼を気味悪がらせた。彼は何度も袋路に突きあたりながら、——そのたびになおさら自分の足音にうしろめたさを感じながら、やっと崖に沿った路へ出た。しばらくゆくと人家が絶えて路が暗くなり、わずかに一つの電燈が足もとを照らしている、それが教えられた場所であるらしいところへやって来た。

そこからはなるほど崖下の町が一と目に見渡せた。いくつもの窓が見えた。そしてそれは彼の知っている町の、思いがけない瞰か下景んかけいであった。彼はかすかな旅情らしいものが、濃くあたりに

漂っているあれちのぎくの匂いに混じって、自分の心を染めて  
るのを感じた。

ある窓では運動シャツを着た男がミシンを踏んでいた。屋根の  
上の闇のなかにたくさん洗濯物らしいものが灰白ほのく浮かんでい  
るのを見ると、それは洗濯屋の家らしく思われるのだった。また  
ある一つの窓ではレシーヴァを耳に当てて一心にラジオを聴いて  
いる人の姿が見えた。その一心な姿を見ると、彼自身の耳の  
中でもそのラジオの小さい音がきこえて来るようにさえ思われる  
のだった。

彼が先の夜、酔っていた青年に向かって、窓のなかに立ったり  
坐ったりしている人びとの姿が、みななにかはかない運命を背負



つて浮世に生きていように見えると言ったのは、彼が心に次のような情景を浮かべていたからだつた。

それは彼の田舎の家の前を通つている街道に一つ見窄みすぼらしい商人宿があつて、その二階の手摺てすりの向こうに、よく朝など出立の前の朝餉あさげを食べていたりする旅人の姿が街道から見えるのだつた。

彼はなぜかそのなかである一つの情景をはつきり心にとめていた。それは一人の五十がらみの男が、顔色の悪い四つくらいの男の兎と向かい合つて、その朝餉の膳に向かつているありさまだつた。

その顔には浮世の苦勞が陰鬱に刻まれていた。彼はひと言も物を言わずに箸を動かしていた。そしてその顔色の悪い子供も黙つて、馴れない手つきで茶碗をかきこんでいたのである。彼はそれを見

ながら、落魄らくはくした男の姿を感じた。その男の子供に対する愛を感じた。そしてその子供が幼い心にも、彼らの諦めなければならぬ運命のことを知っているような気がしてならなかった。部屋のなかには新聞の付録のようなものが襖ふすまの破れの上に貼つてあるのなどが見えた。

それは彼が休暇に田舎へ帰っていたある朝の記憶であつた。彼はそのとき自分が危く涙を落としてそうになつたのを覚えていた。そして今も彼はその記憶を心の底に蘇よみがえらせながら、眼の下の町を眺めていた。

ことに彼にそういう気持を起こさせたのは、一棟ひとむねの長屋の窓であつた。ある窓のなかには古ぼけた蚊帳かやがかかつていた。その

隣の窓では一人の男がぼんやり手摺てすりから身体を乗り出し出していた。そのまた隣の、一番よく見える窓のなかには、たんす箆筒などに並んで燈明の灯った仏壇が壁ぎわに立っているのであった。石田にはそれらの部屋を区切っている壁というものがはかなく悲しく見えた。もしそこに住んでいる人の誰かがこの崖上へ来てそれらの壁を眺めたら、どんなにか自分らの安んじている家庭という觀念を脆もろくはかなく思うだろうと、そんなことが思われた。

一方には闇のなかにきわだつて明るく照らされた一つの窓が開いていた。そのなかには一人の禿はげ顱あたまの老人が煙草盆を前にして客のような男と向かい合っているのが見えた。しばらくそこを見ていると、そこが階段の上り口になっているらしい部屋の隅か

ら、日本髪に頭を結った女が飲みもののようなものを盆に載せながらあらわれて来た。するとその部屋と崖との間の空間がにわかに一揺れ揺れた。それは女の姿がその明るい電灯の光を突然遮さえぎつたためだった。女が坐つて盆をすすめると客のような男がぺこぺこ頭を下げているのが見えた。

石田はなにか芝居でも見ているような気でその窓を眺めていたが、彼の心には先の夜の青年の言つた言葉が不知不識しらずしらずの間に浮かんでいた。——だんだん人の秘密を盗み見するという気持が意識されて来る。それから秘密のなかでもベッドシーンの秘密が捜したくなつて来る。——

「あるいはそうかもしれない」と彼は思った。「しかし、今の自

分の眼の前でそんな窓が開いていたら、自分はその男のような欲情を感じるよりも、むしろものあわれと言った感情をそのなかに感じるのではなからうか」

そして彼は崖下に見えるとその男の言ったそれらしい窓をしばらく捜したが、どこにもそんな窓はないのであった。そして彼はまたしばらくすると路を崖下の町へ歩きはじめた。

## 4

「今晚も来ている」と生島は崖下の部屋から崖路の闇のなかに浮かんだ人影を眺めてそう思った。彼は幾晩もその人影を認めた。

そのたびに彼はそれがカフェで話し合った青年によもやちがいが  
ないだろうと思ひ、自分の心に企らんでいる空想に、そのたび戦  
慄を感じた。

「あれは俺の空想が立たせた人影だ。俺と同じ欲望で崖の上へ立  
つようになった俺の二重人格だ。俺がこうして俺の二重人格を俺  
の好んで立つ場所に眺めているという空想はなんとという暗い魅惑  
だろう。俺の欲望はどうとう俺から分離した。あとはこの部屋に  
戦慄と恍惚こうこうがあるばかりだ」

ある晩のこと、石田はそれが幾晩目かの崖の上へ立つて下の町  
を眺めていた。

彼の眺めていたのは一棟の産科婦人科の病院の窓であつた。それは病院と言つても決して立派な建物ではなく、昼になると「妊婦預ります」という看板が屋根の上へ張り出されている粗末な洋風家屋であつた。十ほどあるその窓のあるものは明るくあるものは暗く閉ざとされている。漏斗じょうご型に電燈の被おほいが部屋のなかの明暗を区切つていような窓もあつた。

石田はそのなかに一つの窓が、寢台を取り囲んで数人の人が立つている情景を解放しているのに眼が惹ひかれた。こんな晩に手術でもしているのだらうかと思つた。しかしその人達はそれらしく動きまわる気配もなく依然として寢台のぐるりに凝ぎょうりつ立りつして

た。

しばらく見ていた後、彼はまた眼を転じてほかの窓を眺めはじめた。洗濯屋の二階には今晚はミシンを踏んでいる男の姿が見えなかった。やはりたくさんの洗濯物がほの灰白く闇のなかに干されていた。たいていの窓はいつもの晩とかかわらずに開いていた。カフエで会った男の言っていたような窓はあいかわらず相不変見えなかった。石田はやはり心のどこかでそんな窓を見たい欲望を感じていた。それはあらわなものではなかったが、彼が幾晩も来るのにはいくらかそんな気持も混じっているのだった。

彼が何気なくある崖下に近い窓のなかを眺めたとき、彼は一つの予感でぎくつとした。そしてそれがまごうかたなく自分の秘ひそかに欲していた情景であることを知ったとき、彼の心臓はにわか



鼓動を増した。彼はじつと見ていられないような気持でたびたび眼を外そらせた。そしてそんな彼の眼がふと先ほどの病院へ向いたとき、彼はまた異様なことに眼を瞠みはつた。それは寝台のぐるりに立ちめぐっていた先ほどの人びとの姿が、ある瞬間一度に動いたことであつた。それはなにか驚きよう愕がくのような身振りに見えた。すると洋服を着た一人の男が人びとに頭を下げたのが見えた。石田はそこに起こつたことが一人の人間の死を意味していることを直感した。彼の心は一時に鋭い衝撃をうけた。そして彼の眼が再び崖下の窓へ帰つたとき、そこにあるものはやはり元のままの姿であつたが、彼の心は再び元のようではなかつた。

それは人間のそうしたよろこびや悲しみを絶したある厳肅な感

情であつた。彼が感じるだろうと思つていた「もののあわれ」というような気持を超した、ある意力のある無常感であつた。彼は古代の希臘ギリシヤの風習を心のなかに思い出してゐた。死者を納れる石棺せつかんのおもてへ、淫みだらな戯れをしてゐる人の姿や、牝羊めひつじと交合してゐる牧羊神を彫りつけたりした希臘人ギリシヤの風習を。——そして思つた。

「彼らは知らない。病院の窓の人びとは、崖下の窓を。崖下の窓の人びとは、病院の窓を。そして崖の上にこんな感情のあることを——」





# 青空文庫情報

底本：「檸檬・ある心の風景 他二十編」旺文社文庫、旺文社

1972（昭和47）年12月10日初版発行

1974（昭和49）年第4刷発行

初出：「文芸都市」

1928（昭和3）年7月号

※編集部による傍注は省略しました。

入力：j.utiyaana

校正：多村栄輝

1998年11月17日公開

2016年7月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# ある崖上の感情

梶井基次郎

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>